

# 新しい風の吹き始めた島から

時代の変遷とともに暮らしも変わる。便利さを手にする一方で、失ってきたもののなかに息づいていた「島らしさ」に、著者は幼いころの記憶を重ねていく。そこには島のこれからを展望する原点があるから。

東京都青ヶ島村無番地。場所は伊豆諸島の最南端、東京から約三六〇キロ、隣島の八丈島から約七〇キロ南に位置している島が、私の生まれ故郷です。そしてここは、現在人口は一九五人という、日本で一番小さな自治体でもあります。車を持てば品川ナンバーの島ですが、東京からの直通となる交通機関はなく、八丈島を経由し、そこから船かヘリコプターで渡ることになります。

東京からの日帰りコースとしては、朝一便の飛行機で羽田を立ち、八丈空港でヘリコプターに乗り継ぎ、青ヶ島へ到着します。その日、定期船が就航

すれば、島に三時間だけ滞在し、お昼過ぎの船に乗り八丈へ。八丈空港から最終便の飛行機に乗り、東京へ夜には戻ることができません。

昭和三四年、私の父と母はそれぞれの島で出会い、結婚し、そしてこの青ヶ島に夢を描き、自分たちの故郷には戻りませんでした。

## 青ヶ島のお葬式

島には診療所がありますが、大病などで治療を要すると、東京の病院に入

院するしかありません。父は入院治療中、癌で亡くなりました。

青ヶ島には高校がないため、中学を卒業して以来、私は本土で暮らしていました。父が死んで一〇年後、母は高齢となり、島での一人暮らしが難しくなったので、上京し私と同居していましたが、心不全で亡くなりました。二人とも東京で息を引き取ったのです。父の時も母の時も東京の葬儀屋にお願いし、お骨にいただきました。

私は、この東京での葬儀に非常に違和感を感じました。火葬場でお骨を拾ったことのある方はお解かりになると

思いますが、骨の説明や、焼く前後にもセレモニー的な説明があります。そういういった一つひとつが、人との永遠の別れの場面にそぐわない音として、響いたからだと思います。

私は一〇年前に青ヶ島に戻り、結婚しました。その一年後、島の若者が海で亡くなり、私は青ヶ島の葬儀を久しぶりに体験しました。

じつは、青ヶ島には火葬場がないので、島内で人が亡くなると、現在でも自分たちの手で土葬を執り行っています。

まず、島の男たちは、遺体を納める「がん箱」と呼ばれる棺をつくります。さらに墓石の代わりに墓とする「ワク」(木で作られた小さな家のようなもの)もつくります。それにつける「シデノウ」や「ワカレノオビ」と呼ばれる飾りなども布などを切り、縫ってつくります。女たちは家を片づけ、通夜や葬式の料理の準備を始めます。青ヶ島にはお坊さんもないので、村のばあちゃんたちの「念仏申し」で見送ります。そして、埋葬への出発。家族は遺影

や位牌を持ち、家族から頼まれた男たち数人が棺をかつき、参列する人たち全員が一団となり、墓に向かいます。あらかじめ掘っておいだ穴に棺を納めると、近親者から穴の中に向かって、埋める最初である石を放り入れます。土ががぶされていきます。線香に火をつけ人に配る人、土をかぶせていく人、花を飾る人、東京の葬儀のような説明もないなかで、みんなが黙々とあるいは涙を流しながら、自分の行うべき作業をします。関わる人すべてが死者への想いを噛み締めながら、行っているのです。

運ぶあいだ、木の担ぎ棒が棺を支えているのですが、担ぐ男たちの苦しそうな息づかい、そして何より、深く掘った穴に置かれた棺に次々とかぶされていく土の音に「人が死んだこと」や「人を埋めること」を心底から実感しました。

この葬儀を体験し、ずっと島へ帰りがたがっていた父や母を、こうやって青ヶ島の土に埋めてあげるべきだったの

ではないか、と本当に悔やみました。

## 死者たちを想う場所

島東側の崖下に、おおちよ大千代という場所があります。ここは昭和五〇年に東京都から港開設認可を受けた場所です、五年に工事が開始されました。以来、しばらくの間予算が組まれ、急な崖をぬって大千代へ続く道路の整備も含めた大工事が行われていました。

島の西側にある唯一の港・さんぼう三宝港は、現在も港湾の工事が行われていますが、湾の地形をしていないため、風などが強いとすぐに定期船は欠航になってしまいます。しかも冬になれば「ふゆにし」と呼ばれる風が吹き続け、毎日の運航はままならないのが実情です。一五日間も連続して欠航することもざらなのです。

私が幼い頃から、よくうちにはお客さんが来ていました、教職員の人たちや島に帰ってきた若い人たちです。彼らは酒を飲みながら青ヶ島の将来につ

いて、「なんとかこの島に産業を」と、熱く語り合っていました。私はというと、傍らで（この人たちは何を言っているのだろうか）という思いで聞いていたものです。当時の青ヶ島は一ヶ月二ヶ月船が来ないのが当たり前前で、毎日の食べ物にも苦しむのに、その島でどう産業を興せるのか……、ありえないことにしか思えなかつたのです。

そのうち、父やその若い人たちの話は、「青ヶ島にもうひとつの港を」という内容につながってきたように覚えています。三宝港は北東の風の日に風ぎます。冬は西風が吹き荒れる青ヶ島、大千代が港なら西風でも運航できると考えたようです。

「大千代をもうひとつの港に」——それ以降、いろいろな方から何回か耳にした言葉です。

平成六年九月二十七日、大千代へ続く道路は、山肌ごと崖崩れを起こし、ちょうどそのとき島内を見学していた三

人の命を奪いました。当時、東京にいた私は、NHKのニュースでそれを知ったのです。当初は三人の生存も確認できない状況で、村の消防団だけでは



「ひんぎゃの塩」製塩施設にて、筆者（左）と青年団長の佐々木義明さん。

なく、警視庁のレスキュー隊も入り捜索が行われ、二遺体は見つかりましたが、見学の案内をしていた青ヶ島の方の遺体はいまもまだ見つかっていませ

ん。

現在の大千代は年一回か二回、少しずつですが、治山工事が行われていきます。鉄砲水なども出るように、崖の吹きつけ工事はまさに命がけです。崩れた際の切り取ら

れたような山肌は、いまだにほとんどが当時のまま残っています。そして誰も「第二の港」の話をしなくなりませんでした。

降りる人のいなくなった大千代港は、上から見下ろすと、苔や海草が繁殖してなのか、いつそう緑色が濃くなりました。私にはその風景が青ヶ島の「頓挫してしまつた夢の碑」のように思えるときがあります。大千代を熱く語つた仲間の中には、父も含めて死んでしまつた人たちが数人います。大千代港をじっと眺めていると、今でも彼らの声が聞こえてくるのです。

## 消えてゆく生活のかたち

私は昭和三七年生まれですが、私が小さいころは電気も普及していませんでした。ランプの生活で、豚肉や魚や亀の肉などを、どこかでさばいたりすると、洗面器を持って取りに行かされました。店もありましたが、船が来なければ物資もないので、野菜や魚、肉、酒、炭などの物々交換が、ときどき行われていました。

子どもたちのほとんど全員が、家事手伝いをやっていました。牛や豚、鶏の飼育、夕餉の下ごしらえ、風呂をわかす、炭をおこすなどは、どこの家でも子どもたちの仕事でした。

全村灯電は昭和四一年。最初は一時間程度だったのが少しずつ増え、四四年には一六時間灯電にまでなりました。そしてこの少し後からだったと思います。ですが、島に公共事業が入り始め、本当に多くの島の人が土木工事を生業にするようになっていきました。それは男

たちだけではなく、お母さんたちもみんな働きに行ったのです。そしてこのときから青ヶ島の生活は大きく変わっていききました。

当時は子どもが八、九人いる家は珍しくありませんでしたし、裕福な家というのはいくらもありませんでしたと記憶しています。つくっていた畑は、土木工事に稼ぎに出るようになって、縮小するようになっていきます。それまで毎月の現金収入というのは、郵便局員や村役場職員、教職員という特定の職業の人だけが得ていたのが、土木によって多くの人が毎月給料をもらうようになり、少しずつ養う鶏や豚や牛などの数も減っていくようになりました。

そのころから、各家にテレビも入り始めました。はじめは映るのは三チャネルとNHKだけでしたが、民放も映るようになり、コマージュやいろいろなドラマを通し、東京の生活を身近に見ることで、私たちのなかに購買意欲というものが芽生えてきました。お菓子や飲み物、それを宣伝する人が

身につける洋服を見て、子どもたちは欲しいと思うようになり、また、親もそれを買って与えられる生活になっていきました。

テレビなどの普及は、私たちの生活から方言も消していきました。以前は誰かが赴任してきても、その人が島の方言を理解することで、まわりと会話ができるようになるケースが多かったのです。もちろんテレビだけのせいではなく、それだけ外部から島へ入ってくる赴任者が多くなった、という経緯もあります。テレビから聞こえてくる共通語、赴任者が話す共通語、こちらのほうがまるで正しい言葉であるかのように、島のなかの多くの人たちがとくに子どもたちが方言を使わなくなっていきました。

また、自動車や農耕機などの導入で、以前は助け合いで行っていた開墾などの畑作業も、以前ほど人員が必要ではなくなりました。

こういった生活の移り変わりは、どの地域でもあったことかもしれませ

ん。大都会東京であっても、昔は江戸弁や物々交換、ご近所の助け合いのよくな生活のかたちがあったと思われます。しかし、生活水準が向上していく、その移り変わりは、危険な要素も含んでいます。それによって薄れていく文化や人とのつながりというのは、否定できないような気がするのです。

### 訪れる人が求めるものとは

いまや、島特産の焼酎「青酎」や、村営の製塩工場でつくられる「ひんぎやの塩」などが少しずつ有名になり、釣りなども、青ヶ島を知る人には憧れの漁場として認識されているようです。

ただ、青ヶ島へのアクセスは気軽にできません。現在では毎日ヘリコプターが就航していますが、乗客定員は九名で、連日満席の状態がほとんどです。先にも触れましたが、船は波が高ければ、欠航になってしまうので、日にちが限定される訪問では、船をあてにして予定をたてるのは、なかなかむ

ずかしい状況です。いくら生活水準が変化しても、この島と都心の距離は厳然として存在します。

しかし、ありがたいことに、時代の常識は変わりました。「不便」であることも「価値」のひとつとして、青ヶ島の魅力として成立させることもできるのです。しかし「価値」まで導いていくために、私たちはもっと努力していかなければならない気がします。この島の魅力について、私たち島びと一人ひとりが考えなければならぬ時にさしかかっていると思います。便利と引き換えに失ってきたもの、それらを認識した上で、今後のこの島をどういう島にしていくなか、この島に残さなければならぬものを守っていく意識や方法を私たちは持たなければならぬと思います。青ヶ島は小さな島です、そして資源は無限ではないのです。

一八年ほど前、能登半島をぶらりと旅行したことがあります。飛び込みで入った宿はランプを使用している宿でした。崖の下にあり、目の前には日本

海がありました。夜、お風呂に入ると大きな窓があり真っ黒い海が見ええました。ランプの灯りは暗くて、手探りで洗面器や石鹸を使いました。暗いなかで響く波の音をとても怖く感じました。その宿は、客室は全室、暖房や照明などの電気を使用していませんが、奥にある宿の人の居住スペースは電気を煌々とつけ、テレビなどの電化製品を使っていました。

私は翌日、輪島行きの始発のバスに乗るために、崖の上のバス停まで行かなくてはならず、しかも大雪が降ったので、手配したタクシーも下まで降りて来られず、雪のなかを歩かなくてはなりません。しかし、手元が見えないお風呂や、暗くて一晩何もすることがないこと、タクシーまで歩いたことについても、とても満足することができました。そこまで行った甲斐があったような気持ちになりました。日本海の冬と海と夜をじっくり味わえた感覚にさせてもらえたのです。

たまたま宿の方の居住空間に気づい

平成6～7頃の大千代港。いま、この栈橋はほとんど使われていない。



かつての三宝港。解をおりた後、苔で滑らないよう岩に板をわたしている。



「兵隊墓」にて。毎朝地区ごとに集まって、ラジオ体操や掃除をしてから登校した。



往時の役牛と島の女性。籠のひもを頭にかけて運ぶ風習はいまでも年配の女性にみられる。



昭和44年、青ヶ島小学校の入学式。



昔の駐在所。ごほうびのカルピスが飲みたくて、勝手に掃除や草取りをしていた。

てしまったのは残念でしたが、いまとなつてはそれもかえつてよかつたと思つています。旅の宿としての演出は、当時としては奇抜であつたと思うのです。

もちろん、私たちの島が観光を柱にして生き残っていくには、いろいろ難しい点もあると思います。しかし、人が訪れることは、この島を知ってもらうことであり、島の活気につながることであります。慎重に取り組むべき課題だと思つています。そして狭き門をかくぐり、あるいは船で時間をかけて訪れる人たちが、この島に何を求めているか、それを私たち島びとがきちんと理解し、実現できたら、この島までの距離も、アクセスの大変さも、価値につながるのかもしれない。

## 島唯一の祭り「牛祭り」の意義

「麦播組合」「宿組合」「屋根組合」「はしけ艇組合」など、いまは残っていませんが、かつて青ヶ島にはさまざまな組合がありました。開墾や麦播き、屋根の葺替

えなどは多くの労働力を必要とするため、共同作業を行う組合組織をつくつていたのです。艇組合などは労働に対する配当が行われていましたが、他はお互いの労働での相互扶助的な団体組織だったようです。昔は不便だった人間同士の助け合いでお互いを活かすシステムのようなものがあつたのです。青ヶ島には、毎年八月一〇日に開催されるお祭り「牛祭り」があります。昭和二五年に初めて開催され、途中中断されていたときもあるようですが、五年に復活、以来開催は継続し、昨年は三〇周年を迎えました。

はじめは牛の品評会を行うための祭りであつたのですが、現在では花き園芸や農林水産物などの品評会、島の産物の即売会なども行われていて、出し物や島の料理の露店などもあり、この島唯一の最大の祭りとなっています。牛祭りは第二八回まで、村が主体となつて企画運営されてきましたが、第二九回から村民主体となり、企画運営は村の有志による「牛祭り実行委員会」

が行うようになりました。島内のいろいろなジャンルの方たちが集まり、上は六〇歳から下は二三歳までと幅広い年齢層がそろっています。

そのメンバーたちは「共進会」「花き園芸品評会」「農林水産物・手工芸・加工品部会」「出し物部会」「前夜祭部会」「花火部会」「会場設営部会」「本部事務局」の八部会にそれぞれ別れ、各部会で祭りに向けて準備を行っていきます。私も一委員として参加させていたのですが、唯一の祭りであることでもあります。この村の楽しみとしても、島の産業の発信源としても、この牛祭りは大きな役目を果たしている、と思つています。何よりも貴重だと感じるのは、祭りをどう行っていくか、私たち委員全員で話し合いながら進めているという点です。

人口も少ないこの村での祭りは、多くの村民の方の協力という助け合いによって、大きく支えられています。

機械などの導入により便利になったことで、それぞれが「個」として畑作

業、漁業などを行えるようになり、この村の日常からかつての組合のような地域の助け合いや話し合いの場が少なくなっているなか、この実行委員会の活動や、祭りの存在の意義は深いと感じるのです。

祭りはこの島の大事な顔です。祭りについて取り組むなかで「私たちは何をすべきか」ということについて、全員が共通の課題として考えるところからは、私たちの祭りのこれからにも、青ケ島の今後についても、かけがえのない力になる、と信じています。

## 「孤島」から「離島」へ、そして未来へ

島史概説などをめくると、青ケ島はもちろん八丈島も、慶応四年（一八五九）明治と改元されたのを知らなかった、とあります。外との交通がないので、情報も入らなかったのです。明治二〇年、小笠原諸島の定期航路が開かれ、五月と六月の年二回、青ケ島にも寄航してもらえることになりましたが、時代化してい

れば素通りするのが普通で、一年じゅう船の来ない年も少なくなかったようです。時をおいて昭和二年暮れ、青ケ島沿岸に漂着した遭難者から昭和の改元を知らされたとあります。同七年、現在の三宝港の建設が始められ、同一五年、青ケ島にもようやく普通町村制が施行され、青ケ島村となりました。

そのような「孤島」だった昔、本場に不便な一時代も二時代も、いわゆる外からの物資をあてにしないで、自給自足に近い形で生活していたころのたくましさは、本場にすぎないことだと思います。その精神はぜひ受け継いでいきたいものです。

村のばあちゃんたちを見てみると、その片鱗を感じることがあります。秋、野菜の種を蒔いても、台風が来て全部吹き飛ばします。台風が止んだとたん、また蒔く、また台風が吹き飛ばす、また蒔く。彼女たちは「また飛ばされた」なんて、ひるんだり疲れたりしません。台風が来なくなるまで、蒔き続けます。自然条件の厳しい、こういう島での生

きる姿勢はこうでなくちゃ、と感じます。家族を養っていればなおさらです。「孤島」だった当時、この島の人々は生きていくために、必死に協力し、代わりにも協力してもらおうことで、自分たちの生活の維持や継続を図ったのではないかと想像します。人とつながらないことは、「死」をも意味した時代でしょう。いまは便利になり、昔よりは「個」の生活が営めるようになりましたが、まだまだ都心の生活のそれより、人とのつながりが残っています。お葬式ひとつとっても一人ではできません。お金を払えばやってくれる業者は、ここにはいないのです。自分以外の誰かは大事な存在であるのです。

子どもが勉学優秀だったりすると、中学から東京へ出したり、「卒業してもここには帰るな」とか、私の知っている以前の青ケ島にはそういう景色がありました。昔は海のかなたにだけ、いい生活やまともな生活があると思われるようになっていきました。この島は不便きわまりなくて、子どもたちには違う人生を、

という親心からだとは思いますが、残念なことにもいまもそういう風潮が色濃く残っていると感じます。

その影響なのか、現代の親たちは、なるべく子どもに不便な思いをさせないようにしているようです。危険なのはそれを気づかせていないことです。不便であることを知ることは、子どもたちにとって悪いことではないと思いますし、そのための親の努力を見せることも、この島ならではの社会勉強だと思えます。

どこの島でも抱えている悩みかもしませんが、青ヶ島も若者の帰島は極端に少ない島です。それでも最近二、

#### あおがしま 青ヶ島 data

八丈島の南67kmに位置する。面積5.97km<sup>2</sup>、周囲9.4km、人口192人(平成19年1月現在)。二重式カルデラ火山の地形を有し、島南部に外輪山、北部に集落が形成されている。八丈島からのヘリコプター就航によって島へのアクセスは以前より便利になった。噴気孔を利用した地熱サウナや自然塩づくりなど、島の資源を活かした観光、特産品開発に取り組んでいる。



三人の若者が帰ってきたことにより、青年団が新任団長に世代交代し、昨年4月赴任の教職員たちも加わり、若々しい新たな風も吹き始めました。

また、島のこの四年間の動きを見てみると、地域のスポーツクラブや、社会福祉協議会、酒造組合など、メンバーによって話し合いを行うなど、運営について新しい動きを見えています。

現在、三宝港は港湾工事が進み、一〇年後か二〇年後、念願であった素晴らしい港ができあがるようです。港ができれば、漁業だけでなく、切り葉などのさまざまな産業も現在より頻繁に出荷ができるようになり、いまよりは

便利になるのでしょうか。

でもそれは、いま青ヶ島が抱えている問題をすべて解決することにつながるのでは考えにくいのです。道路ができ、港ができ、どんなに便利になったとしても、そこにしっかりとした青ヶ島のビジョンがなければ、島の存続はむしろかしくなっていくと思えます。

地域をより発展させるのは、そこに住む人の考え方や生き方、そして努力であると私は信じています。青ヶ島のあちこちで少しずつ始まっている新しい動き、それがいつか海のかなたの若者たちにも響いていくことを願って、青ヶ島からのメッセージを終わります。

#### 山田アリス (やまだありさ)

東京都青ヶ島生まれ。昭和59年、文教女子短期大学英文科卒業。同年から平成7年にかきつけて、井上ひさし氏が座付き作家をつとめる劇団「こまつ座」に所属。平成10年、青ヶ島に戻る。現在は「ひんぎやの塩」の青ヶ島村製塩事業所で製塩作業に汗を流しながら、主婦、一児の母、青ヶ島村民生委員、牛祭り実行委員事務局長などを務める。